

第84図 岩手県内鎧帶出土遺跡分布図

(4) 赤間硯に関する検討

第13次調査において、近世に所属するRD153土坑から硯背に「赤間関大森」の銘が彫り込まれた硯が出土した。石を材とした硯はその性質上単独の資料では年代決定に用い難いとされるが（汐見2001）、赤間硯に関しては近年その銘や形状から編年が成されており（岩崎2005・2006a）、本例のように陶磁器と伴出する場合は遺構の年代決定に有効な資料と成り得る。

近世において南部藩に隣接した仙台藩では赤間硯に用いられる赤色頁岩と酷似する、紫雲石を硯材とした紫雲石硯が生産されていた。それにも拘らず遠方の赤間硯の利用が確認されたことは、近世の飯岡才川遺跡の性格を探るうえで重要な資料であると考えられる。また本資料は岩手県に於ける赤間硯の初出土例であることから、本項では今回出土した赤間硯に関する検討を行うと共に県内における硯の出土傾向を簡単に提示したい。

飯岡才川遺跡出土赤間硯の概要

今回出土した硯は通称「紫金石」と呼ばれる赤色頁岩を硯材としている（註1）。紫金石は長門国厚狭村（現山口県山陽小野田市）において寛保元（1741）年に石脈が発見されており、紫雲石よりも石質が硬く風化により虫食い状の穴が開く特徴を有する。本資料の墨堂（オカ）左端部分にも風化に伴う穴が確認される。硯縁の割りは丸彫りされることから岩崎氏の分類による「B 1」に該当する（岩崎2006a）。覆手の範囲は9cmで、硯面で墨池の占める割合は36.8%である。硯は側面が垂直な長方体を呈しており、水野氏の型式分類に拠ると「長方硯1B b」に該当する（水野1985）。また本

資料が赤間硯であるという確証となった「赤間関大森」銘の彫りは片切彫りされている。

硯の使用痕跡としては、墨堂部分に鋭利な工具で線刻された溝が確認される。硯は製作段階で墨堂部分に鋒芒が作られ、水を介して鋒芒と墨が摩擦することで墨が磨られる。しかし硯の使用が長期間に亘ると鋒芒は摩滅し墨が磨り難くなる。本来であれば砥石を用い鋒芒を復元するが、本資料の場合は墨の摩擦方向と垂直方向に線刻された溝が鋒芒の役割を果たしたと考えられる。意図的に墨堂へ疵を加えることは一般的とは言い難く、使用者の硯に対する価値観の低さが伺える。

「赤間関大森」銘について

「赤間関」とは現下関市の関門海峡沿いの旧市街部を指し、硯の製作地を、「大森」は赤間硯製作に古くから関わった大森家を指すと考えられる。本遺跡出土の赤間硯の銘はその大森家で製作された硯に彫刻される字体を踏襲しており、特に「間」「関」の門構えにその特徴が色濃く反映されている。現在確認されている赤間硯の銘は岩崎により6段階の変遷が想定されており（岩崎2005）、近世5段階（18世紀後半～19世紀前半）において従来の「赤間関住 土佐守大森」銘から「土佐守」という官位が消え、以後「赤間関住」や「赤間関」のみが彫られるという。本資料に見られる「赤間関大森」銘を持つ赤間硯の出土例は現在確認されていないが、「赤間関住 大森土佐守」から官位が消え、「赤間関」へと銘が簡略化する過渡期の製作と推定され、大森家と赤間硯の生産体制の関りを考える上で興味深い資料であると考えられる（註2）。

赤間硯の位置付け

赤間硯は主に西日本で出土しており、城跡や武家屋敷跡から出土する傾向が見られるが、明治時代の製品は北海道の五稜郭跡からも出土が確認されている。本遺跡で出土した赤間硯はその形状と銘のパターンから江戸時代の製作と見られ、赤間硯を古くから生産していた大森家が製作に携わったと推測される資料である。江戸地域以北の遺跡から江戸時代に大森家が製作に携わった赤間硯が出土した例はこれまでに無く、現時点で唯一の例となる。また江戸時代における本遺跡一帯は城下町付近には立地するものの古文書や絵図等から農村地帯であったと考えられ、これまでの赤間硯の出土傾向と異なる事例として興味深い。

赤間硯は当初文人墨客の需要に応え格調高い硯を生産していたが、江戸時代中期に石材の不足を受け生産を停滞させ、後期には寺子屋の激増に伴う識字層の拡大を受けより安価で実用性を重視した硯の生産に推移していくという（岩崎2006a）。本資料はその石質を見る限り本来硯材としては省かれるべき要素を持ち合わせており（註3）、より安価なものをという需要に応えた製品であると推測される。しかし安価になったにせよ赤間硯は江戸時代において全国に名を轟かせた名品であったことに変わりは無く、農村地帯に居住する一農民が簡単に入手できたとは考え難いことから、この硯を所有していた人物は村内の肝入・老名・組頭といったある程度の権力を持った身分であったと推測される。

岩手県内の中世～近世硯出土事例

岩手県内では過去の発掘調査により28遺跡で硯（転用硯を含む）が出土しており（註4）、うち中世から近世に属する資料は16遺跡41点が確認されている（第24表）。遺構に伴って出土する事例は少ないものの、近世においては墓穴や溝から出土する傾向が見られ、破損による廃棄と副葬品としての埋納が想定される。

出土した硯の石材に関しては報告書に石質を記載しない例があることから全てを網羅できていないが、赤色頁岩や輝緑凝灰岩、頁岩等が用いられている。赤色頁岩に関しては、岩手県では硯の原料として「紫雲石」と呼ばれる良質の赤色頁岩（註5）が産出されることで知られる。当初、本遺跡から

出土した硯も紫雲石を材として「赤間関大森」の偽名を掘込んだ可能性があると考えられる程石質が酷似しており、肉眼での判別は困難を極める。「安永風土記」によると享保8（1723）年に仙台藩主伊達吉村が領内を巡礼した折に田河津村夏山三ツ井の紫雲石を硯石に見立て、一般の採掘を差留めて「お留め山」としたという。藩により採掘された硯材は仙台の地に送られ、硯彫師の手で製作が行われた。この硯を日本の端溪石と称して他藩に誇り、贈答用に用いたという（門屋1991）。

岩手県内において紫雲石と考えられる赤色頁岩を硯材とした硯は3遺跡3例が確認されており、これらは旧仙台藩領内または藩境に位置する遺跡である。出土事例が乏しいため現時点では推測に過ぎないが、南部・伊達の藩境から北では紫雲石硯の出土が確認されておらず、今後の発掘調査成果により県内における紫雲石硯の流通範囲を推定できる可能性がある。

ま　と　め

以上、今回の調査において出土した赤間硯に関する検討と県内の出土例を簡略に述べた。飯岡才川遺跡において赤間硯が出土したこと、近世において農村地帯の一集落と考えられていた従来の当該地域の性格を再考する必要が生じ、特に第13次調査区周辺には村内の肝入・老名・組頭といったようある程度の権・財力を保持していた人物の存在が想定される。

また本資料の出土により江戸時代における赤間硯の流通範囲が広がることとなり、同時に銘から読み取れる赤間硯を製作する大森家とその硯生産体制との関係性に新たな一資料を追加することが出来た。今回赤色頁岩以外の石を材とした硯やその形状に関しては取り上げていないが、他地域で生産されたと考えられる硯が確認されることから、今後の発掘調査による資料数の増加により県内における他地域からの硯の流通状況を提示することも可能となるであろう。

（高橋）

註

1. 赤間硯は今から6000万年前の中生代白亜紀に、現在の北九州から山口県中西部を覆っていた湖に火山性碎屑物が堆積してできた赤色頁岩を硯材とする。この赤色頁岩を色調や白・青斑紋の有無で5分類（紫金石・紫雲石・紫青石・紫玉石・紫石）している（堀尾2003）。
2. 岩崎仁志氏のご教示による。2007年2月現在確認されていない。
3. 佐藤鐵治氏のご教示による。佐藤氏は岩手県一関市東山町において、紫雲石とよばれる赤色頁岩を自ら採掘し、紫雲石硯を作成している。氏によると、本資料のように砂質部分の風化により穴が開く石材は研磨の段階で判別できることから、この時点で硯材として用いないとのことである。
4. 2007年2月の段階で報告書が刊行されている遺跡および資料数である。本遺跡分を含む。
5. 紫雲石硯は今から約3億5000万年前のデボン紀に火山灰を含む泥が海底に堆積して出来た粘板岩の一種（赤色頁岩と表記されるのが一般的だが、原文を尊重した）である（門屋1991）。石脈が広範囲に分布しており、採掘する地名の名を付して、正法寺石・三井石・夏山石・横沢石・中倉石・東山石・猿沢石・荻生石・大船渡石等とも呼ばれる。岩手県産の赤色頁岩を実見したところ色調および斑紋から山口県の赤色頁岩と同様に5分類できるが、現紫雲石硯製作者の佐藤氏によると現在は紫雲石と三井石の2つに大別して製作を行っているという。

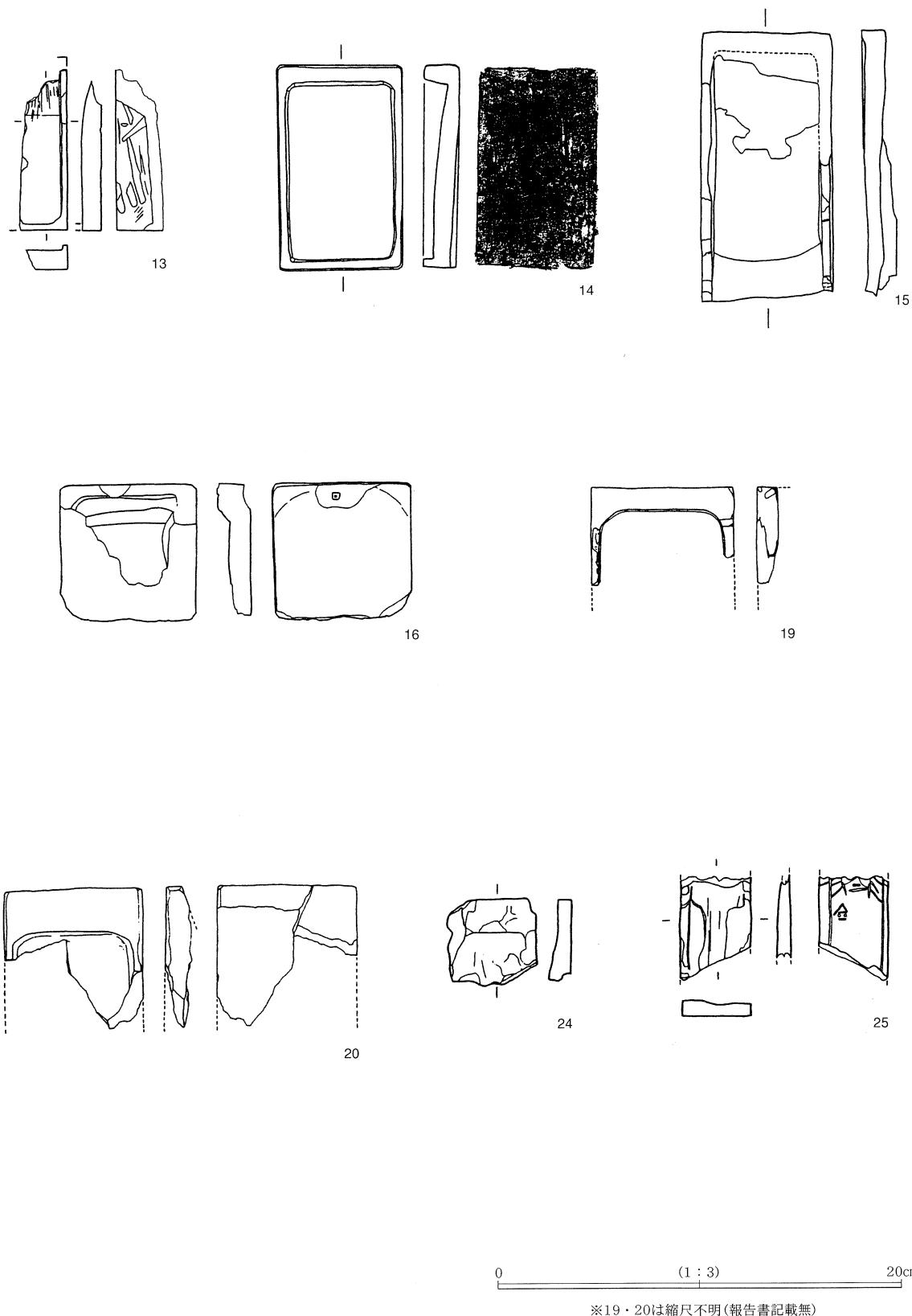
第24表 岩手県内中近世硯出土遺跡一覧

No.	遺跡名	点数	石質	備考	出土位置	年代	遺跡所在地	文献No.
1	姉帯城跡	1	—	2個同一個体	III区H-10グリッド	中世	二戸郡一戸町	1
2	泉屋遺跡	1	粘板岩	漆を用い破損部分を接着	15SK45 6層上面	12世紀後半	西磐井郡平泉町	2
3	泉屋遺跡	1	粘板岩	背面に文様彫込み	15SK45 6層上面	12世紀後半	西磐井郡平泉町	2
4	一戸城跡	1	粘板岩	昭和58年度調査	IC8e III層	12世紀	二戸郡一戸町	4
5	一戸城跡	1	安山岩	昭和59年度調査	トレンチI・II層	中世～近世	二戸郡一戸町	5
6	一戸城跡	1	凝灰岩	昭和59年度調査	S125堅穴状遺構床上	中世	二戸郡一戸町	3
7	一戸城跡	1	凝灰岩	昭和61年度調査	不明	不明(中世～近世の可能性)	二戸郡一戸町	4
8	一戸城跡	1	凝灰岩	記載なし(出土状況写真では 土坑内より出土)	中世	中世	二戸郡一戸町	5
9	岩谷堂城跡	1	—	平成15年度調査	SPA01	中世	二戸郡一戸町	6
10	岩谷堂城跡	1	—	平成13・14年度調査	SH04	中世	奥州市江刺区	7
11	上似内遺跡	1	—	—	表土・整地層	不明(中世～近世の可能性)	花巻市上似内	8
12	金栗I遺跡	1	赤紫凝灰岩	紫雲石硯か	1号墓坑	中世	花巻市南篠間	9
13	河崎の櫛擬定地	1	真岩	硯背に「賀茂」銘	SK06	近世(18世紀後半～19世紀前半代)	花巻市南篠間	10
14	河崎の櫛擬定地	1	赤色頁岩	底面摩滅、陸部を二次加工	B区S78	近世(18世紀前葉)	一関市川崎	11
15	河崎の櫛擬定地	1	頁岩	—	B区S31	近世(18世紀後葉)	一関市川崎	11
16	篠館跡	1	頁岩	C区III E82 2層	近世	近世(18世紀前葉)	遠野市上郷町	12
17	篠館跡	1	頁岩	10号曲輪	中世(15～17世紀初頭)	近世(15～17世紀初頭)	遠野市上郷町	12
18	高玉遺跡	1	輝緑凝灰岩	9号切岸	中世(15～17世紀初頭)	近世	西磐井郡平泉町	13
19	高玉遺跡	1	硬質泥岩	—	不明	近世	西磐井郡平泉町	13
20	田頭城跡(田頭館)	1	—	陸中央部磨耗	不明	近世	八幡平市西根	14
21	田頭城跡(田頭館)	1	—	A区表土下	中世～近世	近世(15～17世紀初頭)	西磐井郡平泉町	15・16
22	中尊寺境内	11	—	破片10・ほぼ完形1	近世遺物包含層、搅乱、 表土下など	12世紀～近世	花巻市城内	17
23	花巻城跡	1	—	—	大溝埋土中	中世～近世	花巻市不動	18
24	不動II遺跡	1	赤色粘板岩	硯背に線刻有	5号溝埋土中	近世(18～19世紀)	一関市千厩	19
25	船丸館遺跡	1	安山岩	IIの郭 III B 5e	5号溝埋土中	近世(18～19世紀)	八幡平市西根	20
26	柳之御所遺跡	1	—	各隅に毛彫り文様有	IIの郭 III B 5e	中世～近世	西磐井郡平泉町	21
27	柳之御所遺跡	1	—	—	区画外地区遺物包含層	13世紀中葉(註1)	花巻市飯岡新田	本書
28	柳之御所遺跡	1	粘板岩	G52-48	—	—	花巻市飯岡新田	本書
29	柳之御所遺跡	1	粘板岩	21SD1	12世紀	—	花巻市飯岡新田	本書
30	柳之御所遺跡	1	粘板岩	21SD1	12世紀	—	花巻市飯岡新田	本書
31	飯岡才川遺跡	1	赤色頁岩	RD153	18世紀後葉～19世紀前葉(註2)	—	花巻市飯岡新田	本書

※年代は硯の出土遺構が判明しているものはその遺構年代を、遺構不明なものは遺跡の主たる年代を示す

※一は石質の記載無し

註1…遺物堆積年代
文献No.は第VI章記載のものと対応



第85図 岩手県内出土中近世窯の諸例

※19・20は縮尺不明(報告書記載無)